

エンカウンター (ENCOUNTER)

第 2 4 8 号

2022 年 12 月 1 日

編集・発行人 〒224-0015 横浜市都筑区牛久保西 2-14-28 山口周三

電話 080-1232-0905

<http://encounter.agape.wjg.jp>

小西芳之助導源先生「コリント人への第 2 の手紙講解説教」より (4)

キリスト教は啓示の宗教

「わたしたちの住んでいる地上の幕屋がこわれると、神からいただく建物、即ち点にある、人の手によらない永遠の家が備えてあることを、わたしたちは知っている。」(コリントⅡ 5・1)

この 1 節が本日の 10 節の総論をなしています。「わたしたちの住んでいる地上の幕屋」とは、自分の身体、肉体であります。「我々の肉体がこわれる」とは、信者にとっては、肉体が死ぬ時を意味しています。もう一つは、信者にとってはキリストの再臨があれば、直ちに栄光体に変わりますから、死を味わうことなく復活体になる場合であります。信者にとっては、この二つの場合があります。その時には、「神から頂く建物、即ち、天にある人の手によらない永遠の建物、復活体が備えられていることを私達は知っている」と。私たちの肉体の滅びる時に、神からの永遠の栄光体、即ち、神から頂く建物に入る。地上の家

は、粗末ですから、幕屋と言っています。一方、神から頂く建物はビルディングであります。そういう事実を私は知っている、とパウロは言っております。パウロは聖霊によりまして、これを啓示されました。キリスト教は、啓示の宗教であります。生まれつきのわれわれの知恵を振り回して理解すべき問題ではありません。「備えてある」と訳してありますが、原語では、「現在所有している」という意味であります。パウロは、4章の終わりに、「内なる人と外なる人」と言いましたが、信者という者はそういう者であります。こういうことが、キリスト教の中心問題です。人が信じないからと言って、説かないとすれば、それは、キリスト教を説いたことになりません。我々は、人の信じる、疑うことを恐れませんが、ただ、聖書に書いてあることを説けばよい。「現在所有している」と言っています。クリスチャンは、内なる人と外なる人を所有している。この箇所は本日の10節全体のサマリーであります。

パウロの勇気の源

「わたしたちは、見えるものによらないで、信仰によって歩いているのである。それで、わたしたちは心強い。そして、むしろ肉体から離れて主と共に住むことが、願わしいと思っている。」(コリントⅡ 5・7-8)

我々肉体を持っている間は、永遠の復活体はまだ我々の不完全な目には見えないが、信じて歩んでいる。それで、我々はいつも心強い、と言っています。パウロは、肉体で患難に耐えているよりも、この肉体がなくなって、再臨までのキリストと共にあるという不完全な状態でも、その方がよいと言っています。パウロの勇気は、こういうところから来ています。死を恐れておりません。こういう真理を説かないようなキリスト教はキリスト教ではありません。

我々の一言一行は必ず報いがある

なぜなら、わたしたちは皆、キリストのさばきの座の前に現れ、善であれ悪であれ、自分の行なったことに応じて、それぞれ報いを受けねばならないからである。」(コリントⅡ 5・10)

我々は、時来たらば、キリストの御前において、我々のなしたこと、心において為したこと、身において為したことすべてがその報いを受けるという。救われるか、救われないかという問題ではありません。救われるということは、キリストの贖いによって決まっていますが、我々のなしたことに對して、皆報いがある、というのであります。こういうことをなぜ、青年のうちに教えてくれないか。……行ないについては必ず報いがあります。ちょっと腹を立てたら、人を殺してみたり、ちょっと気に食わなかったなら、人を恨む。必ず、報いがあることを知ったら、人は悪いことは出来ません。パウロの道徳は、二つの世、即ち、現在の世と、来るべき世とにまたがった道徳です。私は過去40年間に教会でこういう話を聞いたことがありません。私は、過去、10年、15年間に聖書を勉強して、こういうことが分かりました。何故、教会は聖書を勉強しないのですか。牧師は自分の思想、自分の経験なりを振り回して説教しています。ローラ・モーク先生は、「この頃の牧師は、聖書の話ではなく、自分の話をしている」と言われました。他のことは忘れてもよろしい。「我々の一言一行は必ず報いがある」ということを今日しっかり覚えてください。

永遠不滅の体を現在持っている

以上、本日の聖句の解釈であります。意味は誠に明瞭であります。私は、何も私の意見を入れておりません。聖書の言葉をそのまま言っています。こういうことを知らずして、何十年教会へ来ていても駄目です。それは、自分の考えであって、キリスト教ではありません。そんなものはワタクシチャンです。本日のレッスンで最も大事なことは、「永遠不滅の体、そういう生命を我々は持っている」ということでもあります。原語ではエクオーメン（現在持っている）ということです。未来形ではなく、現在形です。もう一つ大事なことは、善悪には報いがあるということです。

名人の碁には、妙手なし

私は、先週 3 日間、NHK ラジオの朝の人生読本で、囲碁の橋本 9 段の話を聞きました。私は、非常な感銘を受けました。橋本氏が「私は、8 歳の時から、碁を打ち始めた。今 58 歳であるから、50 年間毎日碁を打っていることになる。そのため、私の人生は、碁から学んだ原理によって生活している。それで、今まで大過なく過ごしてこられました」と言われました。……私は、不幸にして、クリスチャンで、キリスト教の原理に従って生活をしているという人を見ない。我々は、皆クリスチャンと言ってはいますが、ここでパウロが教える現世、来世にわたる、この人生観に立って、生活しているクリスチャンを見ない。……私自身もその一人ですが、最近になって私もこのことが分かりました。例えば、十分の一献金をしている人がおりません。私も今まではしなかった。私は、最近になってこれを実行し始めました。現世と来世とがあって、本当に来世の方が重いということが分かったならば、十分の一献金は可能です。……それだからパウロのように、命懸けでことができる。この世にへばりついている人に「やれやれ」と言ってもそれは無理です。私は橋本 9 段が、碁の原理によって生活していると言われて、感心しました。そして、もう一つ感心したことは、「名人の碁には、妙手なし」という言葉です。「wonderful way」は無い。普通の (common) 方法しかない、という意味です。諸君が、毎日のコモンな (平凡な) 仕事を、この聖書の教える原理によってなされんことを祈ります。

10年後の感想——天国、永遠の生命、これが聖書の唯一の問題

要するに、天国、永遠の生命、これが聖書の唯一の問題です。「The dominant theme」は、この永遠不滅の生命を自分のものにするということであり、主の名を呼んで、永遠の生命によって歩むことでもあります。今日の司会者の祈りを聞いていたら、私は涙が出て来ました。口では偉そうなことを言っておりますが、心は悩みと苦しみの、この世にへばりついた生活をしています。どうしても、「わが主イエスよ」と主の名を呼ぶことが必要となって来ます。

責任上、10年で多少進歩したことを言う必要があるとすれば、少しく原語（ギリシヤ語）を読むことが進歩したことでしょう。それに、ドイツ語を少しく読むことが出来るようになりました。それぐらいです。

（最後に先生は次の歌を詠まれました。）

このままで わが主イエスの名を呼べば

今日の務めも やすらかりけり

このままで わが主イエスの 名を呼べば

今日の務めも 楽しかりけり

コリント後書の第5章は、聖書の最高峰の一つ

コリント後書の第5章は、聖書の最高峰の一つとも言うべき場所でありまして、キリスト教の最も深い真理であります、信仰、望み、愛の三つがここに展開されております。特に、次の6章の10節までを合わせまして、ロマ書3章から8章までを圧縮したような場所であります。ある学者は、この5章14節から19節までの数節は、実に、パウロの書きたいかなる手紙の、いかなる部分よりも、重大であると言っております。

4 福音書と使徒行伝、手紙、黙示録との違い

聖書の4福音書には、大体、キリストの肉のこと、イエス・キリストが書かれています。勿論最後には、十字架と復活について触れていますが、使徒行伝、手紙、黙示録はキリスト・イエスを書いています。そうですから、勉強する必要があります。4福音書だけでは不十分です。4福音書では、イエスが表に出ている、キリストは裏に隠れています。使徒行伝以下には、キリストが表に出ています。我々は、肉のイエスは知るまい。我々は死して復活したキリストを論ずる、とパウロは言っています。主キリストを論ずると。

新しき創造

「誰でもキリストにあるならば、その人は新しく造られた者である。古いものは過ぎ去った、見よ、すべてが新しくなったのである。」(コリントⅡ5・17)

ここでは、もうイエスという字は出て来ておりません。信者は「新しき創造体」(a new creation)であると言っています。……外なる人は、罪のためにイエス・キリストが十字架にかかり、死したるものであって、内なる人、即ち、復活すべき永遠の生命、それが創造であると言っているのではありません。我々は罪許されて、キリストを信じる時に、新しき創造であると言う。イエス・キリストの持つ永遠不滅の生命を持っているという。クリスチャンは新しい生命であり、生まれつきの人とは違う、ということです。

私は、浄土真宗の教えを多少かじっておりますが、よく似た主張があります。それは「滅ぶべき人間であるけれども、仏の本願を信じる時に、外は凡夫なれど、内はまさしく仏になると決まった菩薩である」ということでもあります。我々信者として力が無いのは、この不滅のものを持っていないからです。我々は、イエスを信じ、贖いに関する理屈は知っていますが、自分のなすべきことをなす力が無い。口で言うだけで、普通の人と何も変わらない。信者は普通の人を持たない力を持っている。そうでないと信者とは言えません。信者の看板を下ろさねばなりません。

和解の務め

「しかし、すべてこれらのことは、神から出ている。神はキリストによって、わたしたちをご自分に和解させ、かつ和解の務をわたしたちに授けて下さった。」(コリントⅡ 5・18)

「すべてが神から出ている」とあります。人間から出ているのではない。人間の努力にあらず、人間の求道心にあらず、神の賜物として、神から来ている、と言う。そして、神は、キリストを十字架におつけになり、復活させて、すべての人類を神に和解させている。これを「福音」という。その和解させたことを宣伝するつとめを私たちに委ねて下さったというのであります。自分は自己宣伝しているのではない。君達にこれを宣伝する務めを神が私に授けて下さったから、君たちに話しているに過ぎないのであると、弁明しております。

キリストの使者

「神がわたしたちをとおして勧めをなさるのであるから、わたしたちはキリストの使者なのである。そこで、キリストに代わって願う、神の和解を受けなさい。」(コリントⅡ 5・20)

無限の光栄ある職務を受けたパウロは、人に対して命令はしなかった。また、人を責めなかった。パウロは「願う」と言っている、その謙虚さを見るべきです。命令でなしに、「entreat」するという。どうか願う、この和解を受けてくれと。これは、パウロの謙遜であるのみならず、神自身が謙遜をもって、パウロを通して勧めているのであります。それを受けるか受けないかは君たちの側にあります。そしてこの和解が完全になった理由は次の21節です。

「神は私たちの罪のために、罪を知らない方を罪とされた。それは私たちが、彼にあって神の義となるためなのである。」(コリントⅡ 5・21)

キリストの義のゆえに我々は義となる。我々は義を行なうことは出来ないけれども、キリストにあって、義と認められる。親鸞の好きな言葉に、「煩惱を断ぜずして、涅槃(ねはん)を得る」とあります。即ち、我々は、罪のまま神によって義とせられるという。ここに、我々が救われる唯一の方法があります。

10年後の感想——これが十字架の贖い

本日の場所は、パウロのどの書簡のどの部分よりも重大である、と学者は言います。そうですから、ここに、パウロの説く聖書の福音の全部が出ております。そして、パウロは、この神の成就し給うた救いを受けるように懇願しています。これは、パウロを通して、神ご自身が、我々に懇願しているであります。どうぞ皆さん、これを受けて下さい、と神の方から言われている。これを「福音」と言います。賜物を受けるだけ。受けるのに条件は要りません。立派な人であるとか、良い行ないをするとか、良い信仰を持つとか、そういうものは不要。神がやろうと言っておられるのですから。この「福音」を伝えるものを「伝道者」と言います。私は、人からどういわれてもよろしい。死ぬまで、この福音を伝えます。皆さんに良い信仰を持つとか、良い行ないをして下さいとか、そういうことを勧めません。勧めても駄目です。我々は、良い行いが出来るような人間ではない。「俺がえらい」と曲がってしまっています。私も80歳になろうとしています、信仰もなければ、行ないもありません。落第です。しかしながら、神は、キリストにおいてすべてのことを成就されました。君たちのすべてを赦して、すべてを成就して、賜物として授けると言っています。これが「十字架の贖い」です。これを受けることを「信仰によって救われる」と言うのです。よろしいですか。私はいつまでも生きてはおりません。神の方から、キリストが頭を下げ

て、「プレゼント」「ギフト」を、どうか受けて欲しいと言っているのであり
ます。我々は、それなのに、まだその資格がないとか、まだ迷っているなど
と言っています。私の方のことは何も言う必要はありません。

10年後の感想——伝道者の務め、すべては神から、新しき創造

第1の感想（伝道者の務めについて）

伝道者の務めは、人に信仰を勧める事でもなければ、良い行ないを勧めることでもありません。ただ、神の成就した救いを受けて下さい、と人に頼みさえすればよい。どうぞ、皆さん、この救いを受けようではありませんか。

第2の感想（すべては神より出ていること）（18節）

これは、小西から出ているのではない。神から出ています。我々の信仰は受け身です。説くことも、受けることも、すべては神から出ています。我々の永遠不滅の生命を頂いたという信仰は動かない。神から出ているからであります。

第3の感想（新しき創造について）

この賜物を受けた時に、新しき創造（new creation）が始まります。浄土真宗では、本願を信じた時に、外は凡夫であるが、内は仏となると決まった菩薩となると説いています。よく似ている。我々は「新しき創造」であり、それは、神から出ているものですから動かない。異なるものであります。